

中信高校山岳部かわらばん

編集責任者 大西 浩

池田工業高等学校

ヤスィックアケルの蒼い空 27

ウルムチへ帰る 2

昼食を済ませた後、以前からお願いしてあった通り、早速ヌルさんに博物館への案内を頼む。ここの呼び物は何と言っても楼蘭の砂漠の遺跡から出土した「楼蘭の美女」。この美女にはこれまで何度も会おうと思いつつ、まだ対面できていない。それというのも1999年は日程的余裕がなく、2000年は隊荷の到着の遅れがあり他の隊員はその間博物館見物をしていたのだが、僕は貨物の発着場に荷物の受け取りに行っていたため、訪れずじまい。2001年もなんやかやで訪れることが叶わず、さらに去年はせっかく訪ねた日が休館日であった。というわけで、僕にとって5度目の正直。2008年に全面改装したというそれは、2000年に訪れたことのある久根さんが全然違うというほど内容が充実しており、3時間かけてじっくり見学したがそれでも飽きず、見たりないというほどの見応えのあるものだった。シルクロード、このロマン溢れる場所で繰り返されてきた幾多の興亡、歴史がここ中央アジアの視点を中心にして見ると今までとは全く違ったものにさえ見えてくる。3000年の歴史を語る文物たちがゆったりと並べられたそこは、悠久の時の流れを感じられ楽しい時間を過ごすことができた。ただ、一つだけ残念なこと、それはまたしても楼蘭の美女と出会えなかったこと。久恋の彼女はなんと深圳へ出張中で不在だったのだ。5回目にしてまた会えぬとは。「大西さんまたウルムチへ来る口実ができて良かったですね」とはヌルさんの慰めの言。その後はホテルへ行き、周辺をうろつき回った。夕食時、ヌルさんの奥さん（以前ヌルさんと二人我が家に招いたこともある）と一年ぶりに対面。久闊を除した。

トルファン観光1

8月18日は終日トルファンの観光をした。山から下りてからヌルさんには、トルファンでの観光と宿泊を希望していたのだが、急な予定変更でもあり、ホテルが取れないとのことで日帰りとした。僕にとってはすべてが2001年の焼き直しで、2回目の訪問だったが、10年ぶりのトルファンは決して期待を裏切るものではなかった。10年前はトルファンまでの道路はまだ高速はなく、工事中であったが、その道路が完成して250kmの道のりをおよそ3時間で繋いでしまった。車窓左手には天山ボゴダの峰々が望めるはずだが、残念ながら高いところは曇っている。



高速道路から望む風力発電用風車

ウルムチから1時間ほど車を進めると砂漠に突然異様な光景が展開する。巨大風車の森、一大風力発電地帯である。圧巻とも言える光景だが、これが現在ウルムチ、トルファンの総使用電力のおよそ1/3を占めているという。これまでずっと忘れていたが、日本の福島原発はどうなったのだろう、急にそんなことが頭の中をよぎった。新疆では楼蘭で原爆実験が行われているとの情報もあり、だから中国はここを離さないとの噂もある。見渡す限りの風車。

ここの風車は北欧スウェーデン製とのこと、10年前の数十倍に数を増やした風車を見ながら、原発、原爆のことへも思いが及んだことだった。砂漠に行くことさらに30分、塩湖を過ぎたあたりから、高速軌道の工事現場となった、これはウルムチ、コルラ間を走らせる新しい鉄道だそうである。本当に新疆の開発ラッシュの勢いは留まる場所を知らない。このツケがどのように回っていくのか、他人事ながら心配になる。

地図帳で確認していただければいいが、トルファンで一番低いアイディン湖は海拔マイナス154m。地球上で一番海から遠いこの場所がなんと海より遙かに低いところにある。まるで地の底に下っていくような道を進み、西遊記の舞台火焰山を横に見ながら、車はトルファンに入っていく。

11:00、最初の見学場所は高昌故城。紀元前1世紀から14世紀まで新疆の政治文化の中心地で、玄奘三蔵が天竺へ行く途上手厚く迎えられた仏教国「高昌国」の遺跡である。東西1600m、南北1500m、城壁に囲まれた炎熱の遺跡をロバ車で巡る。往事、尊い僧がやってきたことを知った王の麴文泰は玄奘をはるばるハミまで迎えに出、自分の師として非常に敬ったという話が伝わっている。そして天竺へ行く三蔵を最高顧問としてこの国にとどめようとしたが、経文を持ち帰るといった目的をもった意思堅固な三蔵は帰りに再び立ち寄ることを条件にその申し出を辞し、天竺に向かったそうだ。しかし、経文を持っての帰途すでに王麴文泰はこの世にいなかったため、玄奘はこの国を通らず、タクラマカン砂漠の南の西域南道を長安に向かったとのことだ。そんな仏教国の遺跡は荒廃し、今は赤茶



高昌故城の仏教寺院跡、イスラム教徒によりすべての仏像が破壊されている

けた砂漠の土に紛れているが最奥の仏寺を中心に往事を偲ばせるに十分であった。

高昌故城を辞した我々が次に向かったのは、アスタナ古墓群。アスタナとは都の墓という意味だそうだが、王家の麴氏を始めとする豪族諸氏の墓地である。墓はいくつもありそのどれもが発掘されているが、公開されているのはそのうち3つ。薄暗い古墳の奥には昨日博物館で目にした複製壁画の本物がそのままの姿であった。11月の終わりに飛鳥を訪れる機会があり、たまたまそこで偶然にかの高松塚古墳の壁画の修復現場を目にすることができたが、黒く黴びたそれは哀しい姿に見えたものだ。高松塚の壁画の発見は僕の中学時代のことと記憶しているが、それから40年人間の持ち込んだ黴がすばらしい文化財を台無しにし、今文化庁が苦渋の選択で修復作業にとりかかっている。しかし、乾燥した沙漠ではその心配もないのだろう、壁画もミイラも多くの星霜を重ねても土埃でくすんでしまうことこそあれ、黴とは無縁のようだ。

この次に訪れたベゼルクリクの千仏洞の壁画もその点では全く同じであった。この仏教時代の遺跡はインド、アフガン、さらには新疆の庫車（クチャ）から続く仏教の重要な遺跡群である。こうした洞窟壁画の最高傑作はなんといっても敦煌のそれであるが、そこへの橋渡しをしたこのベゼルクリクの千仏洞壁画群も眼下に川を望む崖に数世紀にわたって築かれた。残された壁画たちは、幾星霜をこえてその輝きは今なお往事を偲ぶに十分である。しかし、いにしへの仏教国であるこれら高昌国の遺跡は、これまで自然環境には守られたが、人為的な攻撃を何度も経験し、その点では不遇であった。実際、壁画の多くは無残にもはぎ取られ、顔をつぶされたり、文字通り顔を泥で塗られていたり、時には金箔だけがはぎ取られたりしているのである。